「新建」に住むことに成って

三班　山村　和弘

この度ホームページの更新がされると云うことで「新建」に付いて住み始めた頃を思い出すことと成った。

此処に住むことに成ったのは昭和 46 年（1971 年）だから 46 年経過した、随分永い時間をこの団地で暮らしたことに成る。

当時からは周りの様子も随分変化したが取り分け生活環境の変遷には隔世の感じがする。

周辺の家並みも余り無く空地は殆どがススキの荒地で岩石がごろごろ状態であったのを記憶している。

正直当時のことだから計画的に開発された団地ではなく、土地の境界、土地の造成等も現在の各法律的な規制等では大凡許可されないと思える状況ながら次第に拡がっていった団地でポツン、ポツンと建って次第に家の数が増えていった経緯から当時はインフラの計画性は殆ど無かったと思っている。

当然道路の状態も未舗装の砂利道で各家への取り付け道路も凸凹で車の轍（わだち）も深く歩き難い状態を覚えている。

水道も各戸毎に井戸を掘り利用された方、幹線道路から支線（私線）パイプを引いて貰った方と自前で手当てし、トイレは汲み取り及び各戸浄化槽処理、生活排水は側溝に流す等随分お粗末な環境であった。

ここ等の情景は当時の故田村国一副会長が作詞、作曲された「新建音頭」で上手に表現されていたのを懐かしく覚えている。

道路も可部高校が寺山に移って来た（2003 年）を機に現在の拡幅された幹線を利用出来るようになり随分便利になり、この前まで利用していた経路もすっかり忘れる程に当たり前に利用し喜んでいる。

当時の経路は昔の台地区の生活道路を利用したものだから 54 号線旧道の取り付けから団地まで殆ど車の離合は部分的な広い場所で待機しながらくねくねと高松橋（1 車線）、高松山のふもと、寺山のふもとを寄り添う感じで登り着る状態でバック時には脱輪することもあり往来には苦労をしたものであった。

以降、農道の東亜ハイツの入口までの新しい道路が敷設されたのは経路分散となり随分喜んだ事だった。

上水道、下水道も全地域に敷設され次第に昔の様子は解消されていき、かつては周辺の道路の両側に生え伸びる雑草の草刈りと通学路の確保、道路の端にある側溝は汚水用のどぶとして利用されていたが、其のどぶ掃除も地域の共同作業として毎月環境掃除を行う機

会となり近所同士の親しみを醸成する大切な場でもあった。
　現在自治会の定例行事として毎年開催されている盆踊り、秋の運動会は早くから根付き地区の規模としては大きな行事で有った。
　ちびっ子広場での盆踊りでは広場の中央に櫓を組み立てたのも記憶にあり、各班対抗のソフトボール大会は事前に各班毎に練習を行い大会は南原の中国電力の球場を借りて行ったことも楽しい記憶に残っている。

　この様に次第に発展してきた団地も 220 世帯が暮らす地域までに大きく成った。
　しかし 2014 年 8 月 20 日未明に未曾有の大雨が当地域を襲いインフラを始め少しずつ整備されてきた環境を大きく損なうことと成り、3 名の死亡と甚大な被害で約一割の方が止む無く転出せざるを得ない、当団地の再出発に匹敵する難儀を余儀なくされる事となりました。
　丁度この年は 4 月から自治会の制度改革をスタートし新しい制度での理事が自治会を運営頂くこととなり、発足するやいなや復旧、復興に向けて内外での問題解決に対応頂くご苦労には本当に感謝と敬意を表す他は有りません。
　ここ等のご苦労いただいた様子は、携われた方々が他稿で記述されると思えるので、私としては多くを省かせて頂きます。

　だだ、此の再出発に際し昨年度末に「新建地区復興まちづくりプラン」が住民の協議会で検討され魅力ある「新建」への取り組みが纏められました。
　此れは前今田会長から市長に行政への支援を要請する文書としても提出もされています。
　このプランは辺鄙（へんぴ）で有った当地域が、プランを実施することで地域内の往来もやりやすくなり、安全性を高めながら利便性も向上させ、場所的には喧騒からは少し外れ、尚且つ可部の中心には遠くなく、学校、寺山公園等文化的施設も近くに抱え高陽～大毛寺線の開通となれば更に魅力を秘めた地域として期待されるとしており、災害からの復興が更に発展の切掛けに成れば「禍転じて福となす」を成就する事にも成り、推進に向けて地域住民の応援も大切と思われる計画と成っています。

　「住めば都」との例えが有りますが、入居当時の姿からは予想もしない変遷です。
　益々住んで良かったと自慢出来る「新建」が楽しみです。